

仲間意識を育む特殊学級間交流の在り方

～ 地域・学校・児童のリソースを生かして～

齊藤 智恵子

(秋田県仙北市立生保内小学校)

【目的】

全国の小・中学校の特殊学級の平均在籍者数は約2.8人(H15.5.1現在)となっているが、A県では約1.8人(H17.5.1現在)であり、46.4%が一人学級である。一人学級では個に応じた指導がしやすい反面、友達との交流が少なく、社会性が育みにくい側面がある。

文部科学省(2004)は、「特別支援教育を推進するための制度の在り方について(中間報告)」の中で、障害の多様化を踏まえた柔軟かつ弾力的な対応が可能となるような特殊学級・通級指導教室等の制度の在り方や、特殊学級における交流及び共同学習の一層の促進を提言している。中間報告の指す交流は、障害者基本法を念頭に置き、主に特殊学級児童と通常学級児童との交流を視野に入れたものである。ノーマライゼーションの促進のために取り組んでいくべき課題ではあるが、特殊学級児童の中には、その障害ゆえに、20~30人の大集団の中ではそのよさを発揮できず、強い緊張感をもつ子どももいる。

本研究では、中間報告の目指す「柔軟かつ弾力的な対応」の第一歩として、同一の小中学校内の障害種の異なる特殊学級間の交流の在り方を検討する。交流においては、地域・学校・児童のリソースを生かした活動を展開することにより、仲間意識や社会性が生まれ、個々の児童のよさも伸びるのではないかと考えた。

【方法】

1. 対象

知的障害学級：

A児(小2男児、中度発達遅滞、自閉傾向)

情緒障害学級：

B児(小5男児、自閉症、中度発達遅滞)

C児(小4女児、情緒障害、中度発達遅滞)

病弱・肢体不自由学級：

D児(小5女児、慢性腎不全、中度発達遅滞)

2. 内容

領域・教科を合わせた指導の中で、次のような活動を設定した。

(1) 自己リソースを生かした合同朝の会

「朝の会」を特殊学級3クラス合同で行うことにより、特殊学級児童が1日に1回は必ず全員顔を合わせ

る機会を設けた。活動の中では、仲間意識・役割意識の育成と、児童一人一人の自己リソースを生かす配慮に心がけた。

(2) 地域リソースを生かした生活単元学習

T町は県有数の観光地であり、野外体験にふさわしい場が数多く存在する。また、町単独予算により配置されたALTがいることは人的リソースと捉えられる。

地域リソースに浸りながら、子どもたちが楽しくかわりあえる単元をと考え、以下のような生活単元学習を実践した。

月	単 元 名
4月	1.水芭蕉を見に行こう(湿原)
5月	2.つつじ祭りに行こう(公園)
	3.わらびとりに行こう(高原)
6月	4.遊覧船に乗ろう(湖)
8月	5. 湖で遊ぼう(湖)
9月	6.ほうれん草つみにチャレンジ!
10月	7.ハロウィーン・パーティーへようこそ

(3) 学校リソースを生かした通常学級との交流

自己リソースを生かした朝の会や、地域リソースを生かした生活単元学習で培った力を生かし、それを般化させるために、12月には特殊学級の合同生活単元学習「なかよしバザー」に2年生の通常学級児童(22名)を招待した形での交流活動を行った。通常学級(2年生)では、特殊学級から招待されたことを受け、学級活動の一環として取り組み、ダンスなどの練習をして「なかよしバザー」に参加してくれた。バザー終了後、2年生からも「お店屋さん」への招待を受け、互いに交流を深めた。

3. 検証方法

(1) アンケート

各活動の成果について、特殊学級担任(3名)、補助教員(1名)及び各児童の保護者(4名)にアンケートをとった。

(2) 行動観察

特殊学級在籍児童の各活動を通しての変容を観察した。特に「仲間意識」「社会性」「自己成長」が認められる具体的な行動に注目した。

【結 果】

1. 仲間意識

特殊学級担任及び保護者へのアンケート結果では、合同朝の会や合同生活単元学習が「仲間意識」や「役割意識」を育てる上で有効であったとする回答が「そう思う」「ややそう思う」を合わせて100%であった。子どもたちの雰囲気にも「認め合う雰囲気」や「楽しい雰囲気」があること、そして4人の子どもの「つながりの深まり」に対しても教師・保護者とも、同様に100%の回答であった。

2. 社会性(ソーシャル・スキル)

各学級担任に、4人の子どものソーシャル・スキルの向上についてアンケートをとったところ、「あいさつ」「返事」「話し方」「温かい言葉がけ」「やさしい頼み方」などのスキルが特に向上したことが指摘された。また、「順番やルールを守ること」や「自分の役割を遂行すること」にも向上がみられる。これらも「朝の会」や「合同生活単元学習」の活動の中で身につけていったことが伺われた。

3. 自己成長

合同朝の会や合同生活単元学習を通して4人の子どもたちがそれぞれに成長したと思われることを、特殊学級担任及び保護者に自由記述の形でアンケートをとった。その中で指摘されたこととしては、A児・B児の着席行動の定着、4人の子どもの話し方の向上(オウム返しの解消・相手を意識した話し方)、好ましい言葉がけ、自信をもった表情・態度、活動への集中・根気強さ、責任感、短作文の上達などであった。

【考 察】

1. 自己リソースを生かすよさ

子どもたちの自己リソースを生かすよさは、子どもたち一人一人に好きなことや得意なことを朝の会や生活単元学習の中で役割として与えることによって、子ども一人一人が自信をもって生き生きと活動できることと、子どもたちの中にお互いを認め合う雰囲気が生まれることにある。

平成15年度以前は、独立した形で個別指導を重視していた本校特殊学級であるが、平成15・16年度と2年間に渡り合同の朝の会を継続したことにより、子どもたちの仲間意識は明らかに高まってきている。

安心して、信頼しあえる仲間の中で、のびのびと歌ったり、好きな話題で話をしたり、身体表現をしたりしながら、子どもたちが実にその子らしい姿を見せてくれると感じる。また、友達とのかかわりは、「自分」に気づかせてくれたり、ソーシャル・スキルの必要性を感じさせてくれる。よりよいかかわり方について、教師に具体的に個別に教えてもらうことも多いが、

教師や友達のよい行動を知らず知らずのうちにモデリングしていることも多い。「ありがとう」「大好き」といった勇気づけの言葉が教室に響き渡っていることも嬉しいことである。

2. 地域リソースを生かすよさ

地域リソースに着眼して生活単元学習を組み立てるよさは、地域の自然そのものが教材となり、交流活動の媒体となること、地域のよさを感じることで移動に比較的時間がかからないこと、見慣れた風景であるため子どもたちにとって安心感があること、地元であるため休日に家庭でも活用可能であること等が挙げられる。子どもたちは地域の自然にどっぷりとつかり、友達とかかわり合いながら、生き生きと活動している。新しいチャレンジにも、友達がいるから安心して取り組める。様々な活動を通して、子どもたちのつながりはいっそう深まっていると感じる。地域リソースが子どもたちの成長にとって大切な舞台になってくれたことは間違いのない。

3. 学校リソースを生かすよさ

特殊学級設置校のよさは、特殊学級児童と通常学級児童が日常的に交流できる点にある。通常学級児童との交流は、特殊学級児童が通常学級の音楽・図工・体育等の授業に参加する形が多いが、教科や学年によっては学習内容が特殊学級児童にとって難しく、ともすれば場の共有のみに終わることも多い。

特殊学級の合同生活単元学習に通常学級児童を招待した形での交流のよさは、特殊学級児童に合わせた活動内容であるため、特殊学級児童が活動に無理なく参加できること、特殊学級児童が主役となって生き生きと活躍できること、通常学級児童に特殊学級の児童や学習の様子をよりよく理解してもらえること、特殊学級と通常学級の児童がより親しみを感じるなど等が挙げられる。特殊学級児童4人のつながりがしっかりできているからこそ、通常学級児童との交流活動にも躊躇することなく取り組めたのであろう。

文部科学省は特殊学級児童と通常学級児童との交流や共同学習の一層の促進を提言している。特殊学級児童にとって無理なく楽しく交流活動や共同学習を進めるためにも、通常学級児童が特殊学級児童をよりよく理解し、お互いに仲間として認めあえるようになるためにも、特殊学級児童の実態を踏まえ、地域・学校・児童のリソースを生かした交流活動をステップを踏みながら進めていくことが効果的であると考えられる。

【参考・引用文献】

文部科学省(2004)「特別支援教育を推進するための制度の在り方について(中間報告)」